

---

# 新世紀D B

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新世紀DB

### 【NZコード】

N5168C

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

GT最終回後より遙か遠くの未来、宇宙からサイヤ人の生き残りや他の悪い宇宙人達が初代悟空を殺しにやって来た。勘違いで悟空JR・が狙われていると知った好戦的な娘の桃子は、悟空JR・を守る為、命懸けでそいつらと戦つて行く事に・・・ 不定期更新

## Battle 1 (前書き)

### 登場人物／作品主要人物

主人公：孫<sup>そん</sup> 桃子

血液型：O型

年齢：16歳

身長：161cm

体重：45kg

特徴：ピンク色の長い髪、黄色の瞳、お尻には毛が生えた細長い茶色の尻尾が生えている。常にセーラー服着用。

性格：普段は大人しいが、キレると暴力を振るう。ぶちギレるとフリーザ口調に成り敵を抹殺、更に怒りが爆発すると超サイヤ人に変身する。一人称は全て「私」。

：孫 桃子がハ テ グ ク！に出て来るピンク色の長い髪の少女に似ていると突っ込んではいけない。

此處、パオズヤマに、ピンク色の長い髪に黄色の瞳、セーラー服を着た一人の可愛い少女がいた。彼女の名は、孫 桃子。あの孫悟空の血を引くサイヤ人である。その証拠に、お尻に細長い茶色の尻尾が生えている。桃子はこの尻尾が大のお気に入りらしく、毎日欠かさずにお手入れをしている。

その桃子の下に、三人の少年がやつて來た。  
紹介しよう。右から新島 春樹、神納 翔、蒲田 志郎。一応断つておくが、この三人は歴とした地球人だ。

「孫、遊びに行こうぜ」

と、リーダー格の翔が言った。しかし桃子は、何故か嫌がつてい  
る。

実は、この三人は桃子を何時も虐めている奴らで、遊びに行こう、と称して林の奥へ連れて行き、暴行を加える。虐める理由は、尻尾が生えているからだ。

「嫌だ……」

桃子が断ると、

「おい、お前翔さんの誘いを断るのかよ？」  
と、春樹が言った。

「断つたらどうなるか解ってんだろうな？」

今のは志郎だ。

「わ、分かつたよお」

桃子はそう言って、三人に付いて林の奥へ入つて行つた。

林の奥へ来ると、春樹はロープを取り出し、逃げられ無い様に桃子を木に縛り付けた。

「おらよ！」

春樹は桃子の腹を蹴つた。

「うつ！」

呻き声を出す桃子。

「あーあ、可哀想」

と、みぞおちをやる志郎。

「……めて」

桃子は呟いた。

「ああ？ 聞こえ無えな」

そう言つて睨む翔。

「もうやめて！」

その途端、ブチッとロープが切れ、三人が吹っ飛び、周囲の木々がバキバキッと倒れた。

焦つて冷や汗を搔いた桃子は辺りを見回し、

「やつちやつた」

と、その場にしゃがんで頭を抱えた。

人里から離れた岩場の上空を、一台の丸い宇宙船が飛んでいた。サイヤ人の宇宙船だ。その宇宙船が、パオズヤマの桃子の家へ墜落した。

ズドーン！ 辺りに轟音が響く。するとそこへ、桃子が慌てた様子でやつて來た。

「宇宙……船？」

その時、宇宙船が開き、中から尻尾を生やした男が出て來た。男は桃子に気付くと、

「サイヤ人か？」

桃子は頷いた。

「孫 悟空を知らないか？」

孫 悟空……恐らく、初代悟空の事だらつ。

「孫 悟空は私の父ですが？」

因みに、桃子の言う孫 悟空は悟空……の事である。

「何処にいる？」

「父に何か？」

「子どもには関係無い。居場所を教える」「用件の言えない人には教えられません」

「そうか。ならば死ねえ！」

男はいきなり襲い掛かった。

「キャツ！」

桃子は宙に舞い、男はジャンプして踵落としをした。

「うつ！」

桃子は地面に叩き付けられた。

「サイヤ人は好戦的の筈だがな。まあ良い。戦利品としてこいつは頂いて行こう」

男はそう言つて桃子の尻尾に触れた。

「放せ！」

桃子はぶちギレ、叫んだ。

「それは私のお気に入りなんだ！ 汚え手で触つてんじゃねえ！」

男は桃子の変貌振りに驚いて尻尾を放してしまった。

「はつ！」

と、素早く立ち上がり足払いを掛ける桃子。

「うわっ！」

男はバランスを崩してひっくり返ってしまった。

「やつてくれるじゃねえか……。お前が女だから尻尾を抜くだけで許してやろうと思ったが、もう許さねえ！」

男はそう言つて氣を溜め、超サイヤ人に成った。

「貴様に絶望と言つ物を味合わせてやる」

桃子はニヤリと笑つた。

「何が可笑しい？」

「否、超サイヤ人の癖に、私より戦闘力が低くてつい笑つてしまつただけですよ」

「くつ……キッサマア！ 超サイヤ人は全宇宙最強の戦士だ！ それを雑魚呼ばわりか！？」

男はそう言つて桃子の顔面を殴つた。が、桃子は顔を横に向けるだけ。

「くすぐつたいですね」

その言葉に完全にキレた男はラッシュ攻撃を放つた。けれども、桃子には全然効いていない。

「クソツ、これならどうだ！？」

男は上空に飛び上がり、連続エネルギー弾を放つた。

ドーン！　と、砂煙が立ち込める。そして、煙が晴れると、そこにはクレーターの様な大きな穴が空いていた。

「フツ、粉々に消し飛んだか」

その時、男の背後で声がした。

「おや、あなたは何処を狙つているのですか？」

驚きのあまり顔が強張つてしまつた男は、恐る恐るを後ろを振り向いた。その先には、腕を組んで一ヤリと笑つてゐる桃子がいる。

「なつ……につ……！？」

「あなたでは勝負になりません。消えてしまいなさい！」

桃子はそう言つて、手の平を男の顔面に向け、気合砲を放つた。気合砲を喰らつた男は、一気に後ろへ吹つ飛んで墜落した。

「かーっ」

と、桃子は構え、

「めーっ」

で全身の氣を一ヶ所に集め、

「はーっ」

で氣弾を作り、

「めーっ」

で標的の位置を確認。

「死にやがれえ！」

男が唐突に猛スピードで飛びながら連続エネルギー弾を放つて来た。しかし、桃子はそれを無視して光線を放つた。

「波ー！」

放たれた光線は迫り来る氣弾を蹴散らし、男に直撃した。

「何！？」

男は地上に押し戻され、地に体が着くと爆発し、砂煙が立ち込めた。それから暫くして煙が晴れると、男は戦闘服がボロボロで、全身体だらけの状態で倒れていた。

桃子はその男の前に降り、

「私は孫 桃子です。あなたのお名前は？」

「俺は……セリーバだ……」

「そうですか。良かつたですね。あなたは幸運ですよ？ 死ぬ前に私の名を聞けたのですから」

男は恐怖と絶望感に因つて全身がガタガタと震え始めた。

「おや、どうしました？」

「たつ……助けてくれ！」

「はい？」

「俺が悪かった！ 頼む！」

「フフフ……、実に愉快だ。これから死のうつてのに、必死に命乞いする姿。見ていて面白いですよ」

そう言つて、桃子は人差し指をセリーバの心臓に向ける。

「死ね！」

ビー 桃子はピンク色のレーザー・デスビームらしき物を放ち、セリーバの心臓を撃ち抜いた。

「なつ！？」

セリーバは絶命した。

「ん？」

背後に気配を感じた桃子は徐に振り向いた。その先には、例の三人組が体を震えさせ、脅えている姿があつた。

「ねえ、もつと楽しい遊び、教えてよ？」

桃子はそう言つて、三人に近付いた。

「うわあああ！」

と、悲鳴を上げて逃げる翔。

「来るな化け物！」

「化け物だー！」

と、残る一人も逃げ出した。

ピキッ！ と、桃子は怒りのマークを額に浮かべる。

「い、今には流石の私もムカ付いたわ！」

桃子は目にも留まらぬスピードで三人を追い、一人を捕まえた。

志郎だ。

「志郎！」

春樹がそう叫び、

「お前の事は一生忘れないぞ！」

と、翔が続く。

「お前等、俺を見捨てる気か！？」

しかし、二人は無視して逃げて行つた。

一人残された志郎は、恐る恐る桃子の顔を見た。桃子は満面の笑みを浮かべている。

「化け物……確かにそう言つたよね？」

志郎は恐怖と絶望感に襲われた。

「許さないよ？」

と、笑みを崩して睨む桃子。

「やめてくれ！ 僕が悪かった！ 何でも言つ事聞くから暴力だけは！」

「言つたね？」

桃子はニヤリと笑い、眼をキラリと輝かせた。何を考えているのだろうか？

「蒲田くんは今日から私のシモベよ」

「し、シモベ？」

「うん。って事で、逃げた一人を連れ戻しに行つて来てくれる？」

「あのさ、今は捕まってるから何も出来ないけど、行かせたら俺逃げるよ？」

「そつかあ。じゃあ、人の言う事聞けない悪い子にはお仕置きだね

桃子がそう言つと、

「ぎやああああ！」

と言つ悲鳴と共に志郎の体は痣だらけに成つた。

「忠誠、誓つてくれるよね？」

「うわあああ！」

と、志郎は逃げ出した。が、突然目の前に桃子が現れた。

「バカな！？今後ろに！」

と、後ろを振り返る志郎。しかし、そこに桃子の姿は無い。

「忠誠、誓うよね？」

志郎は恐る恐る振り向き、頷いてしまつた。

「連れて来て？あの二人」

「そ、それは良いけど、一人に何をするつもり？」

桃子は志郎の顔を蹴り飛ばした。

「うわっ！」

地面を転がり、大木に激突する志郎。

「痛つ、何すんだよ！？」

桃子は志郎に近付き、

「口の聞き方に気を付ける」

「えつ？」

「聞こえなかつたか？ 口の聞き方に気を付けると言つたのだ」

「聞き方つて、今まで通りじゃ駄目なの？」

桃子は満面の笑みを浮かべ、志郎の後ろにある大木を思いつ切り

蹴飛ばした。

「バキッ！ と、音を立てて吹つ飛び大木。

「あつ、パンツ見えた」

と、志郎は頬を赤くした。

「エッチ！」

桃子は思いつ切り蹴り飛ばそうしたが、慌てて寸止めした。

「孫、もしかして俺に態と見せてるの？」

「違うわよ！ あんたを蹴るうとしたのよ！」

桃子は思いつ切り蹴り飛ばさうしたが、慌てて寸止めした。

「じゃあ何で蹴らないんだよ？」

「だ、だって、蹴つたら蒲田くんが、吹つ飛びじゃない」と、桃子は足を下ろし、モジモジし始めた。

「それよりあんた、私に何か言つ事がある筈よ」

「言つ事？」

「良い？』『逆らつてすいません。許して下さい桃子様』って、土下座しながら言つのよ」

「出来るかよ」

すると桃子は氣彈を作つた。

志郎は慌てて、

「申し訳ありません！ 許して下さい桃子様！」

と、土下座をした。

「……良いわ、許してあげる。その代わりあの二人を連れて来て『解りました！ 必ず連れて来ますのでそこでお待ちしてて下さい！」

志郎はそう言つて、一人を連れ戻しに行つた。それから待つこと數十分、志郎は本当に二人を連れて來た。

「蒲田くん、ご苦労様」

「はい、桃子様の為ですか」

「桃子様？ お前、この女に何されたんだ？」

翔は志郎の態度に驚いて訊ねた。

「えつ、俺は桃子様のシモベとして忠誠を誓つているだけだけど？ そうだ。翔さん達も一緒に桃子様のシモベにならないですか？」

「しないよ

と、桃子は言った。

「どうしてですか！？」

「私知ってるよ？ 蒲田くん、この一人に逆らえなくて、態と嘘めに参加してたんだよね？」

「桃子様？」

「でも、この一人だけは本気で私を嘘めてた。だから……」

桃子はそう言つと、一人の頭を掴んで思いつ切りぶつけた。

ガーンツ！ 二人の頭が楽器と化して音を響かせる。二人は白眼を剥いて氣絶した。

「これでこいつらも懲りるでしょ」

「だと良いんですけど」

「どう言う事？」

「俺、この一人を裏切ったんですよ？ 多分この一人、次は俺を虐めの対象にすると思います」

「その時は私の所に来なさい。私が庇つてあげるわ」

「桃子様……」

志郎は涙を流した。

「あら、どうして泣くの？」

「いえ、嬉しくて涙が出たんです。桃子様の様なお方のシモベになれて良かつた……。

桃子様、色々迷惑を掛けるかも知れませんが、これから宜しくお願いします」

志郎はそう言つて、頭を下げた。

「頭上げて」

「はい」

と、直る志郎。

「シモベごつこは、もう、おしまい！」

「えつ？」

「私ね、蒲田くんの事何時も見てて思つたんだあ。神納くん達は蒲田くんを言いなりにさせて、どんな気分なのかなあ？ つて。だから私もやつてみたけど、人を奴隸扱いするのはあまり良い気はしないね」

「えつ、それじゃあ桃子様は態と？」

桃子は志郎の脣に人差し指を当てがつた。

「ううん」

と、首を横に振り、

「様なんて付けなくて良いって。桃子って呼んでくれる？ お・ね・  
が・い」

と、桃子はウインクをし、ハートを飛ばした。そのハートは、志郎の顔の前まで飛んで行ったかと思うと、そこで溶けるかの様に消えた。刹那、志郎の心臓が高鳴り、体が火照る。それと同時に、顔が赤く成った。

「あ、ひょっとして照れてる？」

「そ、そんな訳無いだろ！？ 夕焼けの所為だよ！」

桃子は空を見上げた。

「確かに夕焼けだけど、木々が邪魔してるから、これじゃあ顔は赤く成らないよ？」

「照れちゃあ悪いか！？」

桃子はクスクスッと笑った。

「別に？ 良いよ？ 好きなだけ照れても。私気にしないから」

「……」

沈黙する蒲田。

「ねえ、蒲田くん？」

「えっ？」

「私つて、化け物？」

志郎は頷いた。

「そつか。やつぱりそう見えるんだ？」

「ごめん……」

「ううん、謝らないで良じよー。何も蒲田くんが悪い訳じゃないし  
！ 悪いのは……悪いのはパパの血なんだもん」

「どう言う事？」

「知りたい？」

志郎は頷いた。

「解った。じゃあ特別に、蒲田くんにだけ教えてあげる。耳貸して

？」

志郎は自分の耳を桃子の口元に持つて行った。

「（実はね、私は地球人じやないの。サイヤ人つて言つ、宇宙人の）」

「（さいや人、つて？）」

「（戦闘民族だよ。元々は環境の良い星を征服して他の星の人達に高い金で売り付ける様な事をしてたらしいけど、今は殆んど滅びて、残っているのは私とパパとパパの友達のベジータさん（ベジータ」「の方）だけ）」

志郎は引いた。

「君も地球を征服して何処かの星に売りつけるつもりか？」

「バカな事言わないで。こんなに環境の良い星で産まれた私が、そんな事する筈無いじゃない。じゃ」

桃子はそう言つて、地面を蹴つて猛スピードで何処かへ飛び去つて行つた。

## Battle 1 (後書き)

異議のある方、苦情の方、突っ込み、その他、感想等待っていますので宜しくお願い致します。

:読み逃げしないで下さい。読み逃げすると超桃子スーパーももこが地の果てまで追い掛けて来ます。（嘘です。。。orz

パオズ山の家がサイヤ人の宇宙船に因つて破壊され、住む場所を失つた桃子は、父・悟空」「…」と悟空と共に、サタンシティーにある140はとっくに超しているだろうと思われるパンの家に居候する事に為つた。

「成る程、それで私の家に置いて欲しいと言つ訳かい」

「駄目？」

と、悟空。

「別に構わんよ。それにしても、家が宇宙船で破壊されるなんて困つたもんだね。所で、その後ろに隠れてる娘は一体？」

パンは悟空の後ろに隠れて顔だけ見せている桃子の事を聞いた。

「ああ、僕の娘さ。桃子って言つんだ」

桃子は悟空の後ろに完全に隠れてしまつた。

「おや、お祖母ちゃん嫌われてしまつたよ」

と、苦笑するパン。

「桃子、パン祖母ちゃんに失礼だろ？」

悟空に促され、桃子は顔を出し、徐に前へ出た。

「も、桃子です」

と、お辞儀をする桃子。

「や、やや！ そのお尻に生えているのは尻尾かい！？ こりや珍しいね。内の家計で尻尾の生えた女の子は一人もいなかつたからね。もしかすると、超サイヤ人に成れるかも知れないよ！」

「超サイヤ人つてあの金髪の！？」

「おや、知つておつたのかい」

桃子は頷いた。

「私、この間その超サイヤ人と戦つた事あるんです。そいつ、パパの事を搜してたみたいで、私が何の用かを聞いたらいきなり襲つて・・・」

「ふむ、到頭來てしまつたか・・・。そやつの名、セリーバとか言つて無かつたかい？」

「えつ、どうしてそれを？」

「あれは私がまだ産まれる前の事じゅつた。私の祖父、孫 悟空が、地球を侵略しようとやつて来る宇宙人達から地球を幾度と無く救つていた・・・。その噂が全宇宙に広がつた訳なんじやが、どうもガラ悪い連中が私のお祖父ちゃんを殺そうとやつて来てね・・・。で、その内の一人がサイヤ人の生き残り、セリーバ。セリーバは一度お祖父ちゃんにこてんぱんにやられて追い返されていてね・・・。恐らく、今回もお祖父ちゃんの命を狙つて来たんじやろ」

「その孫 悟空つてお祖父さん、パパと同じ名前ですけど・・・？」「ああ、それは見た目と食いしん坊な所がそつくりだから桃子ちゃんのパパに同じ名前を付けたんじや」

「そうなんですか。で、そのお祖父さんは今・・・？」

「さあね。悟空が子どもの時に見たつきり、一回も見てないぞ」

(そのお祖父さんどんだけ長生きなのよ？見た感じ、この人は140越えてそうだから、今生きているして考えると、200は当然越えてるわね)

「話しへ戻すが、もしかすると、今後もそう言つ奴らがお祖父ちゃんと勘違いして悟空を狙つて地球に来るかも知れない・・・」

(勘違いで、パパが狙われる？)

「悟空はお祖父ちゃんと違つて反戦的だからねえ・・・。私もこんなどし、誰か悟空を守つてやれる人はいないもんかねえ・・・？」

「守る・・・」

「ん？」

「私が、パパを守ります！」

「そうかい」

パンはそう言つて氣を探つた。

「どうやら来たみたいだね」

その時、ドーンツと外から爆音が聞こえた。

パンは窓から外を見る。

パリーーン！ 窓ガラスが割れた・・・否、何者かに因つて割られた。

「危ない！」

桃子は割れたガラスの破片がパンの目に入る所で助けた。  
「間一髪でしたね、お祖母さん」

「ああ、ありがとう」

ズドーン！ 壁が破壊され、セリーバそつくりのサイヤ人が侵入して来た。

「嘘・・・でしょ？」

「ほう、貴様か。弟のセリーバを殺したのは  
セリーバの兄だと言つ男は、何かを期待する様な目で桃子を見つめた。

「俺はマーピン。お前はセリーバより使えそうだ。俺と手を組まないか？俺と一緒にこの星を制圧するんだ」

「だがマーピンの誘いを桃子は断つた。

「何故だ？俺達は同じサイヤ人だろ」

「この星は私が産まれた場所です。なので制圧はしません」

桃子はそう言って微笑んだ。

「そうか・・・ならば死ねえ！」

マーピンは桃子に殴り掛かつた。が、悟空が彼の腕を掴んで止めた。

「娘に手を出すなら僕が相手に為る！」

「何だキサマは？」

「悟空、およし！」

「婆はすつこんでろ！」

ローン！ マーピンはパンに向けて氣弾を放つた。

「うつ！」

パンは白眼を剥き、気絶して倒れた。

「パン祖母ちゃん！？」

「ふん！」

マーピンは悟空の鳩尾を攻撃した。

「うつ！」

悟空もパン同様、白眼を剥いて氣絶した。

「バタ！」と、倒れる悟空。

「パパ！」

と、近付こうとする桃子をマーピンは抑えた。

(こいつ、この間の奴より強い・・・私と同じか、それ以上だ！)

「狭すぎる、外へ出やがれ！」

マーピンは桃子の頭を掴み、壁に向かつてぶん投げた。

バコーン！ 壁を破壊して外へ吹つ 飛ぶ桃子。

「女、俺を楽しませてくれよ？」

「良いわ。けどその前に、場所を変えよ。此処じや巻き添え喰らつて死人が出る」

「良いだろう」

「あんたが話しの解る人で良かつたわ。付いて来て」  
桃子はそう言って、岩場の方へ飛んで行つた。

「これから死ぬと言うのに、自分より他人の心配か」  
マーピンは桃子の後を追つた。

岩場に着くと桃子は地上に降り、

「此処なら誰にも迷惑を掛けずに戦える」「の」と、目の前に降りてきたマーピンに言つ。

「そしてお前は死に、この星の生命体は全て消滅する」

「そつならない事を願うわ

「やるか・・・」

二人はお互に構えた。

「そつちから来な

と、マーピンを挑発する桃子。

「まあ、随分と自信タップリだな。まあ良い、一瞬で終わらせてやるわ！」

刹那、桃子はマーピンを見失った。

（速い！何処から来る・・・！？）

桃子は気を探りつつ辺りを見回して警戒する。

「しまった！」

桃子は慌てて後ろを振り向くが、時既に遅く、マーピンの攻撃を受けた桃子は吹っ飛んだ。マーピンは高速で先回りし、飛んで来た桃子を思いつ切り蹴り飛ばし、再度先回りして地面に叩き付けた。

「うっ！」

桃子は腹這いに叩き付けられた。

（やばい、このままじゃ勝てない！）

桃子はフラつきながら立ち上がった。

「ふつ、もう立っているのが限界みたいだな。どうする？今なら俺と手を組むと言つ条件で助けてやつても良いぞ？」

桃子はペッと血を吐き捨て、

「誰があんたなんかと」

そう言つて突進したが、マーピンにひらりと身をかわされ、踵落としを見事に喰らつて地面に叩き付けられた。

「がはっ！」

と、吐血する桃子。

「そろそろトドメを刺してやるつか？それとも、まだ痛めつけられたいか？」

「トドメ刺されるくらいなら、痛めつけられてた方が、マシ・・・

かな」

「お前変わってるな。大抵の奴なら早く楽に為りたくて死を選ぶんだがな」

「うん、私はだから。痛めつけられるのが快感なのよ」

「やうか。ならお前には戻りながらゆっくり死んで貰うとしよう」

マーピンはそう言って上空に飛び上がり、連続エネルギー弾を放

つた。

ドーン！　と、爆音と共に砂煙が立ち込める。そしてやがて、砂煙は晴れた。

「なつ、消えた！？」

刹那、マーピンの背後に桃子が現れる。

「何！？」

マーピンは慌てて振り向いた。その先には、一いち方に背を向けている桃子がいた。

「一寸あんたさあ、本氣出してくんない？あんたが本氣出さないから、戦う気が起きないのよ。頼むよ」

マーピンは拳を思いつ切り握り締めた。

「そうか、本氣を出して欲しいか。知らないぞどうなつても！」

マーピンは叫び、気を一気に高めた。

1億、1億1千万、1億2千万・・・。マーピンの戦闘力はまだまだ上がる。そして、彼の戦闘力が1億5千万に到達した。すると、髪が金色に変色して逆立ち、全身を金色のオーラが纏つた。が、戦闘力はまだ上がり続ける。

(こ、こいつ何処まで上げる気だ？)

桃子は怯え、震えた。

「ハハハハツ、もう誰にも俺は止められんぞ！」

マーピンはそう言って、桃子を指で突いた。

「えつ！？」

一瞬、桃子は何が起こったのか解らなかつた。気が付くと、自分は猛スピードで上空を飛んでいた。

「うわっ！」

桃子は巨大な岩に激突し、グイグイめり込んだ。

「喰らえ！」

マーピンは巨大な気功波を放つて來た。

ドーン！　桃子のめり込んだ岩は破壊され、砂煙が立ち込めた。

「ふつ、死んだな」

「マー・ピングがそう口にすると、砂煙の中から一発の光弾が飛んでき  
た。

「何！？」

と、慌ててかわすマー・ピング。

「バカなつ、生きてる筈が・・・！」

マー・ピングは砂煙を凝視した。すると、黒い人影が二つ、確認出来  
た。その二つの影は、やがてハツキリと見える様に成って行き、砂  
煙が完全に晴れると、人影の正体が完全に認識出来る様に成った。  
「なつ、貴様は先刻潰した筈！」

マー・ピングは目の前で自分を睨み付けている、桃子を抱き抱えたオ  
レンジ色の胴着を着た男に驚いた。

「パパ・・・？」

桃子は自分を抱えている男に向かつて言つた。しかし、男は首を  
横に振つた。

「ああ、お祖父ちゃんの方か・・・」

「オメエ、パンの玄孫の子どもか？」

その問いに桃子は頷いた。

「もしかして、助けてくれたの？」

「ああ」

「なつ！？」

桃子は飛び退いた。

「何で助けたりしたの！？」

「何でつて、オメエがやられそつだつたからに決まつてるじゃねえ  
か」

「私がやられそつだつた？ふんつ、試していただけよ！良い？もつ  
一度と助けないで頂戴！」

桃子はそう吐き捨てた後、マー・ピングの方を向いた。

「ふふふふ、そろそろ私の本気を見せてあげましょう」

悟空は桃子のその口調に、ある人物を思い浮かべた。

(フリー・ザ?)

悟空のイメージが、桃子の姿と重なる。

「私を本気にさせた事、後悔するが良い！」

そう言つと、桃子はマーピンの背後に高速移動し、咄嗟に振り向いた彼の顔面に蹴りを浴びせ様とした。だがしかしである。彼に足を掴まれ、

「そんな物、俺に当たると思うか？」

マーピンは薄ら笑いをし、桃子を思いつ切り地面に投げ飛ばした。（やっぱ見てらんねえ！）

悟空は瞬間移動し、桃子を受け止めた。

「けつ、放せ！」

桃子は悟空を振り払い、

「邪魔だ！」

と、回し蹴りを放つ。が、悟空に足を掴まれ、固定された。

「今のオメエじや、オラにも奴にも勝てねえ！」

「五月蠅い！」

桃子は悟空にラッショウ攻撃をした。だが、悟空には全く効いていない。

「ほお、仲間割れか？」

「何故・・・何故だ。何故だ何故だ！何故なんだー！」

桃子は叫んだ。刹那、桃子の瞳が黄色から緑に変わり、眉が金色に変色し、ピンクの長い髪が眉と同じ金色に変色して逆立った。「これは・・・？ そうか！ついに成れたのか！超サイヤ人に！」「ふつ、貴様が超サイヤ人に成った所で、この俺には勝てん！」マーピンはそう言つて、桃子に向かつて急降下した。

「それはどうかな？」

桃子はひらりと身をかわし、急降下してマーピンを追撃した。

「波ー！」

と、気功波を放つ桃子。

「ドーン！ マーピンは氣功波を喰らい、地面に墜落した。

「くつか、この俺が・・・あんな小娘に！」

「かーめーはーめー波ー！」

瞬間、マー・ピンに向かつて光線が飛んで来た。

「そんな物相殺してくれるわー！」

マー・ピンはそう言ひて起き上がり、光線を放つた。しかし、パワーは桃子の方が微かに上で、マー・ピンは圧倒される。

「くつ、女の癖に何てパワーだー！」

「女の、癖に・・・？」

途端の桃子の怒りが増し、

「女を・・・ナメるなあー波ー！」

「やめろー！」

マー・ピンは叫んだ。

「うわあああー！」

悲鳴と共にマー・ピンは立ち込めた砂煙に飲み込まれた。

桃子は、煙が晴れるのを確認すると、横たわったマー・ピンの側に着地した。

「楽しかったわ。またやろう!?.」

桃子はそう言つて、マー・ピンの手を差し出した。

「トドメ・・・刺さないのか?」

「刺さないわ。だって、あんたと戦つてる時、凄く楽しかったもん。やられっぱなしだったけどね。だから、生きて、また遊ぼうよ?」

マー・ピンは笑みを浮かべ、

「トドメ刺さなかつた事、後悔する事に為るぞ!?.」

「その時は、またあんたを倒す」

「俺の方が強く成つていたら?」

「殺されるのは・・・勘弁かな?」

「なり手下にしてやう!?

「良いわ、何にでも成つてあげる

マー・ピンは桃子の手を掴み、立ち上がつた。

「本当に、手下に成るんだな?」

「ええ、ー言は無いわ

「ふつ、なら今直ぐ成って貰おうか！」

マー・ピングは桃子の鳩尾を殴った。

「うつ！」

超化が解ける桃子。

「知ってるか？サイヤ人ってのはな、死の淵から生還する度に強く成るんだ」

「成る程・・・私がトドメ、刺さなかつたから・・・」「約束だ。俺の手下として働いて貰おう」

「フツ」

桃子はニヤリと笑つた。

「何が可笑しい？」

刹那、マー・ピングの胸に風穴が空いた。

「なつ！？」

「デス・・・ビー・・・ム・・・」

桃子は倒れ、気絶した。

「うひ、この餓鬼・・・！」

と、胸を押さえるマー・ピング。

「クソッ、こんな・・・所で・・・！」

マー・ピングはその場に倒れ、絶命した。

Battle 2 (後書き)

デスマーム・・・!?

B a t t l e 3 (前書き)

フリー・ザ復活の第3話。突つ込みたきやどりひが御自由に。

油断していた訳では無い。

だが警戒を向けるポイントには確かに不手際が有ったかも知れない  
ボロボロの体で悟空ジャーを上空から降る無数の気弾から必死に庇いながら孫<sup>そん</sup>桃子は苦しく認めた。

無数の気弾を背中に受けながら桃子は策を練る。

敵は3体の地球外生命体。倒せない相手では無いが、彼女の目の前には今、戦いを好まない最弱サイヤ人の姿が在る。今出れば、確実にそれに光弾が当たるのは目に見えている。

(くつ、このままじゃ私の体力が保たない・・・。せめて、せめてこの気弾さえ止んでくれれば・・・！)

その時である。一瞬ではあるが、次の気弾が放たれる迄に間が出来た。

これはチャンスだ、と思つた桃子は素早く上空を向き、気弾を連射して無数の気弾を相殺する。

「アニキ、全部止められていますぜ」

そう言つたのは、戦闘服を着た茶色のトカゲだった。身長は人間の大人と殆ど変わらない。

「それよりあの女、尻尾生えてますぜ？」

と言うのは、戦闘服を着た全身青の何だか判らない生き物。

「だからどうした？小娘の一匹や一匹、俺達の手に掛かれば何て事も無い。兎に角今は攻撃を続ける。何れ疲れ果てて抵抗出来なくなる筈だ。その時に一斉に光線を放つんだ」と、戦闘服を着た赤いトカゲ。

「流石アニキ！頭がキレるぜ」

それからも、気弾はずつと続いた。

「・・・・・・」

桃子は諦めたのか、気弾の相殺を止めた。

「今だ！」

赤いトカゲの叫び声と共に、三体の地球外生命体は一斉に光線を放つた。

三方に向から猛スピードで迫る赤、青、緑、三色の光線。そして、桃子は光線を浴びた。

服がボロボロに破け、全身の肉が裂けて血が滲み出す。

「はあ・・・・・・！」

桃子は気を解放し、ピンクの長髪を逆立てて短い金髪にし、黄色の瞳をグリーンに変えて超化した。

同時に光線が爆発して煙が噴く。

そしてやがて、煙が晴れると、桃子の姿は無く、在るのは悟空。

「・の姿だけだつた。

「ふつ、木つ端微塵に成つたか」

その時、背後に何かの気配を感じた緑のトカゲがふと振り向いた。

「あ、アーチキ！後ろ！」

緑に促されたかの様に赤いトカゲは後ろを向いた。続いて青も振り向き、感嘆符を浮かべる赤と青。

目の前では金髪緑眼の桃子が三体を睨んでいる。

「先ずは誰から行こうか？」

と桃子から見て右から青、赤、緑の順番に見る。

「あ、アーチキ。逃げま・しょう・・・・ぜ？」

と青は赤の言葉を遮つて言った。

三体は怯えて震えた。

「先ずはあんたから」

桃子がそう言つると同時に、緑の首が吹っ飛んで血が噴水の如く噴き出した。

浮力を失ない、地面に真っ逆様の縁。

「次はお前だ」

同じく青も首が吹つ飛んで浮力を失なつて真っ逆様に落ちる。

「残るは貴様一人だな」

「まつ、待つてくれ！話せば解る！」

赤は両手を前に出して桃子を宥める。が、桃子は問答無用で手の平を赤に向けて気弾を作る。

「死ねえ！」

と気弾を放とうとするが、気弾が手から離れない。

『こいつは奴隸にしましょ』

と頭に聞き覚えの無い声が響いた。しかし、何と無く懐かしい気もする。

「誰だ！？」

桃子は辺りを見回すが、赤以外は誰もない。

『何処を見ているのですか。私はあなたのなかですよ』

その言葉と共に、桃子の隣に太い尻尾を生やした紫頭のつり田男の幻体が現れた。

「誰だあんた？」

『おや、この私を知らないのですか。私は宇宙の帝王フリーザ。以後、お見知りおきを』

『どうでも良いわそんな事』

『おや、死にたいのですか？』

フリーザがそう言って手の平を自分の顔に向けると、桃子も同じ様に気弾が準備された手を自分の顔に向けた。

赤は「隙ありだ！」と桃子の横つ腹を蹴り付けた。が、微動だにしない桃子。

「邪魔よ、あんた」

桃子が足で赤を軽く突くと、赤は猛スピードで吹つ飛んで岩の壁に激突して破碎し、更にその先にある岩の壁にめり込んで漸く止まつた。

だがそんな事は今の桃子には関係無かつた。

「どうなつてゐるのよこれ？」

桃子は氣弾の矛先が自分に向いていると手が言つ事を利かない事に動搖しながら言つ。

『知りたいですか。教えてあげましょつ。私があなたの手を操つているのです』

感嘆符を浮かべる桃子。

『私とあなたは一心同体。操ろうと思えば何時でも操れるんですよ』

「何だと！？」

『良いですか？死にたくなければ、私の言う通りにするのです』

「…………解つたわ。で、私にどうしろと？』

『今吹つ飛ばした奴を手下にして下さい。奴は頭がキレる。殺すには惜しい』

フリー・ザはそう言つて桃子を解放した。

桃子は目にも留まらぬ速さで赤いトカゲ擬もじきの眼前に移動し、気弾を作つた手を向けた。

「や、やめてくれ！」

トカゲ擬きが怯えて震えながら言つ。

「殺されたくない無かつたら私の舍弟になりなさい」

だがトカゲ擬きは「嫌だね」とそれを拒否した。

「雌猿の手下になるくらいなら死んだ方がマシだ！」

トカゲ擬きがそう言つと、桃子はピキッとう擬音と共に額に青筋を立てた。

「さ、猿ですつて……！」

眼を真っ赤に光らせてトカゲ擬きを睨む桃子。

猿 それは桃子が一番氣にしている事だった。サイヤ人は人型の猿である為、異星人たちは見下す意味でそう呼ぶ事がある。その為、桃子は氣にするのである。

『一寸あなた、何を為さる氣ですか？』

フリー・ザは今にも氣弾を放とうとしている桃子に訊ねた。

『駄目ですよ、そんな事しては。此奴は手下にするのですから』  
だが桃子はフリー・ザを無視した。

「貴様だけは許さない！」

そう言つて桃子は氣弾を放つた。

氣弾をまとめて喰らって木の端微塵になるとかが擬ぎ。

# 貴様、何て事を！？

彼が怒るのも無理

彼が怒るのも無理は無い。何せ、頭の切れるトカゲ擬きを手下に出来なかつたのだから。

（かつ、体が、動かない！？）

「 言つたでしょ、うー私とあなたは一心同体。操ろうと思えば何時で

も操れる、と

フリー サは桃子の口

(返せ！)  
私の体！

五月蠅い！ 稲の頭ん中で喰らないて下さい！」

「嫌です。おなじはムの言ひ

物の事を黙呑う様か。

( ۱۵۴ )

桃子は舌打ちならぬ頭打ち（？）をして意識を心の奥底に落として行った。

桃子が意地を張る。「桃子が無理で、タロ殿の心配にならぬ。」

「やめるんだ桃子！」

「アーティストのアーティスト」

ラッシュを繰り出し、悟空」「…を吹

せる桃子。

「どうした孫 悟空！？」

追い討ちを掛け、再度ラッショウを浴びせる。

「ナメック星での勢いを見せてみろ！」

桃子は悟つた。フリー<sup>フリーザ</sup>は勘違いしている、と。

(やめてつ、パパを殺さないで！)

桃子の幻体が出現し、桃子<sup>フリーザ</sup>の頭に桃子の声が響く。

「五月蠅いつ、邪魔をするな！」

(あんたは勘違いしてる！この人はあんたの捜してる男じゃない！)

「何だと！？」

桃子<sup>フリーザ</sup>の動きが止まる。

(あんたの捜してる孫 悟空は、もういない)

「そうですか。では私は引っ込むとしましょ！」

言ってフリー<sup>フリーザ</sup>は、桃子を解放した。

ホツとした桃子は、安堵の溜め息と共に胸を撫で下ろした。

「父さん怒つたぞ！」

怒りが爆発した悟空<sup>フリーザ</sup>は、超化して桃子に襲い掛かった。

「えっ、一寸待つ」

桃子が言い終わる既の所で、悟空<sup>フリーザ</sup>の拳が右頬にヒットした。

「父さんは！」

悟空<sup>フリーザ</sup>の左パンチが桃子の左頬に決まる。

「お前を！」

と今度は膝蹴りをお見舞いの悟空<sup>フリーザ</sup>。

「そんな風につ！」

お次は両手を組んで思いつ切り叩き付ける。

桃子は勢い良く吹っ飛び、地面に墜落して全身を強く打ち付けた。

「育てたつ

と氣を溜め、

「覚えはつ」「覚えはつ」

でかめはめ波の準備をし、

「無い！」

で光線を桃子に向けて放つた。

「イヤアアアアアア！」

と光線をまともに喰らつて悲鳴を上げる桃子。

光線が爆発し、爆音と共に砂煙が舞い上がって桃子を包み込む。そしてやがて、砂煙が晴れると、ボロボロの度が更に酷く成った桃子が姿を現した。

悟空<sup>ヒカル</sup>は徐に桃子の側に降り立ち、睨み付けるとしゃがんで桃子を引つくり返し、膝に乗せてお尻をピシッとした。桃子を引つくり返し、膝に乗せてお尻をピシッとした。

「ヒイツ！」

と激痛で目から汗が滲み出る桃子。

「お前みたいな不良娘はお仕置きだ！」

ピシッ！

「ヒツ、ヒ免なさい！」

だが謝った所で状況は変わらず、悟空<sup>ヒカル</sup>のお尻ペンペンは続く。泣きつ面に蜂、とは正にこの事だろ。

(パパ、怒ると恐い……)

桃子は一つ、勉強した。

B a t t l e 4 (前書き)

第4話、ベビー復活!...?シモベにされた桃子!-

雲一つ無い快晴。

その日、孫 桃子はオレンジスター・ハイスクールの編入試験を受けていた。

英國数理社の内4科目を制覇し、現在は社会の問題用紙と睨めっこしている。

彼女、英國数理は群を抜いて得意なのだが、社会だけはどうも苦手。

溜め息を吐き、全く解らないわ、と頭の中でぼやく。答案用紙は白紙である。

教卓前のテスト監督が時計を確認し、席を離れると桃子の下へ移動し「終」と言って問題用紙と解答用紙を回収する。

「何でお前、白紙じやないか」

言って監督は去つて行く。

桃子は机に拳を叩き付けた。

バキッ！ 机に罐<sup>ヒビ</sup>が入る。

(やべつ…)

桃子は慌てて帰り支度を済ませて校外へ出た。

「ヘイ！ お嬢ちゃん、家まで乗つてかない？」

校門前で車に乗つた男に絡まれた。

この手の者は恐らく誘拐か何かを企んでいるだろう。だが桃子はそれに気付かず「本当！？」と車に乗り込んだ。

しめしめ、と男。

桃子はただならぬ気配を感じた。

(二) この気は！？

「オジサン、車停めて！」

「嫌だね！」

男が断ると、桃子に胸倉を掴まる。

「バツ、バカ！放せつ、運転中だ！」

「停めなきや殺す！」

言つて桃子は反対の手でエネルギー弾を作る。

男はナイフを出して桃子の胸に刺そうとするが、胸に当たった瞬間、ナイフが折れてしまった。

怒った桃子は「死にやがれえ！」と男に氣弾を放つ。

男と車は木つ端微塵。粉々になってしまった。

「汚え花火だ」

言つて桃子は舞空術を発動して氣配の有つた岩場へとすつ飛んで行つた。

草一つ生えていない、南東に位置する岩場。

そこには初代悟空に太陽に落とされ消滅した筈のベビーがいた。

「ククククツ、孫 悟空がいなくなつた今、全宇宙ツフル化計画の再開だ！」

「ツフル化計画つて何かしら？」

とベビーの背後に現れたのは桃子だった。

ベビーは振り向くと、いきなり襲い掛かつた。

不意打ちを喰らい、怯む桃子。

「不意打ちは卑怯なんじやない？」

言つて桃子は体勢を立て直して反撃する。

パンチとキックのラッシュをし、ベビーを容易く痛め付ける桃子。

ラッシュで身動きが取れないベビーは、みるみる内に全身がボロボロに成つて行く。

(クソツ、メス猿如きに手も足も出せんとは…)

「トドメよ！」

桃子はベビーを思いつ切り吹っ飛ばし、かめはめ波を放つ。猛スピードでベビーを追撃する黄色い光線。

「今だ！」

ベビーは態と光線に当たり、液化して光線の中を真つ直ぐ進んで

桃子の下まで行き、桃子の体内に侵入した。

桃子は光線を止め、額の汗を手の甲で拭った。

その瞬間、全身が金縛りに遭つたかの様に動かせなくなつた。  
(体が動かない!?)

桃子は焦り、無理矢理に動かそうとするが全く反応しない。  
ベビーの顔が桃子の頬に現れた。

「クククク、お前の体はこの俺が貢つた」

「何!? そう言おうとするが、口が動かない。

「では貴様の体に卵を産むとしよつ

言つてベビーは桃子の体内に産卵した。

(何だ、何をした此奴?)

ベビーは桃子の記憶を読んだ。

『成る程。このメス猿は孫 悟空の末裔まつえいか』

と言つてベビーの頭の声が桃子の頭に響く。

もしかしたら そう思つて桃子は体内のベビーに念を送る。  
(あんた一体何者なの!?)

だがベビーの応答は無い。どうやらフリーザの時とは違い、届かないらしい。

『何だこの猿は。未だ意識が残つていやがる』

ベビーは気を上げ、桃子の意識を押し潰す。

(な、何か急に、眠く・・・なつて・・・きた・・・)

桃子は意識を失つた。

桃子が目を覚ますと、そこはいつも家のベッドの上だった。  
視界には年老いたパンの姿がある。

「おや、目が覚めたかい」

頷く桃子。

「お前さん、家の前に倒れていたんだよ。何かあったのかい?」

桃子は起き上がり、胸を撫で下ろした。

(良かつた、アイツ出て行つたんだ。てか喉……)

「ねえ、お祖母ちゃん」

「何だい?」

「お水頂戴」

そう言われ、パンは部屋を一旦離れ、コップに水を入れて戻つて來た。

桃子はコップを受け取り、水を飲み干した。

刹那、コップが手から放れ、床に落ちて割れた。

同時に桃子の黄色い目が真っ黒に染まる。

「おお、大丈夫かい?」

そう聞くパンを、桃子は殴り飛ばした。

数メートル程飛び、尻餅を着く。

「これつ、何をするんだい!?」

「五月蠅い!」

言つて桃子は光弾をパンに放つて殺害した。

『来いつ、桃子!』

ベビーの声が桃子の頭に響いた。

(ベビー様!?)

桃子は氣を最大にし、天井を破壊して何処かへ飛び去つて行つた。

神の神殿にやつて来た桃子。出迎えたのはベビーだった。

桃子はベビーの前に着地し、立ち膝をした。

「お呼びでしょうか、ベビー様」

「大至急ドラゴンボールを集めて来い！」

「ドラゴンボール？何ですかそれは？」

「七つ集めるとどんな願いでも叶えてくれる星が描かれたボールだ」

「解りました！お任せ下さい、ベビー様！」

そう言つて桃子が飛び発とうとするとい、ターバンを巻いた黒い奴が現れた。ミスター・ポポである。

「これを持っていけ」

ポポは見た事も無い機械を渡した。

「これは？」

「ドラゴンレーダーだ。それがあればドラゴンボールの位置が判る」

「有り難う！」

桃子は礼を言つと、颯爽と飛び去つて行つた。そして直ぐに七つ集めて戻つて來た。

「迅いな

とベビー。

「はい、ベビー様の為ですので」

言つて桃子はボールの入つた袋をベビーに渡した。

「良い心掛けだ。そう言つ者には後で褒美をやる」

そう言つとベビーは、ボールを出して神龍を呼び出した。

「願いを言え。どんな願いでも三つだけ叶えてやる」

「三つ！？一つじゃないのか！？」

「三つだ」

「どうか。では願いを叶えて貰おうか」

「お安い御用だ。で、何を願う？」

「ブルマとベジータだ！」の一人を蘇らせろー。」「良いだろう」

神龍の眼が輝き、ブルマとベジータが出現した。

「此処は！？」

「私たち生き返ったみたいよ、ベジータ」

「願いは叶えた。さあ、二つ目の願いを言え」

ベビーは桃子に小声で言ひ。

「（桃子、ブルマを気絶させろ）」

「（どっちがそなんですか？）」

「（の方だ）」

「（解りました）」

言つて桃子はブルマの前に高速移動し、鳩尾を殴つて気絶させた。

「ブルマ！？」

と驚くベジータ。

「ベジータ、驚いている暇があるのか？」

「何！？」

振り向くベジータ。

「なつ、貴様はベビー！てつきり力カロットの野郎に倒されたと思つていたが、生きてやがったのか！」

「俺は不死身だ」

そう言つてベビーは桃子に合図を送つた。

桃子は頷き、ベジータを羽交い締めにする。

「なつ、放せ！」

「ベビー様、今です！」

ベビーは液化してベジータの体内に侵入。ベジータはベビー化した。

「もう良い桃子、放せ」

桃子はベビーベジータを解放した。

「よし神龍、二つ目の願いだ！」の星の隣にツフル星を作り直すんだ！」

神龍はその願いを叶えた。残り一つである。

「三つ目の願いを言え」

神龍に促され、ベビー・ベジータが願いを言おうとするが、桃子が言つた。

「ベビー様、最後の願い、私のを叶えさせて頂けないでしょうか？」  
ベビー・ベジータは目を瞑つて暫く考え、

「・・・良いだろう」

そう言つた。

桃子は一例をして神龍の目の前に飛び上がった。

「私の中の、フリー・ザとか言う奴を追い出してください！」

「良いだろう。その願い、叶えてやろう」

神龍が言つと、桃子の体からフリー・ザの実体が飛び出した。  
願いは叶えてやつた。ではさらばだ

神龍はドラゴンボールに戻つた。

「させるか！」

桃子は急降下して袋を取つて急上昇。そして飛び散らうとするボールを袋で包んだ。

内部で一瞬ボールが暴れる。

ベビー・ベジータはその仕草に呆気に取られていた。

「なつ、どう言う事だ！？」

フリー・ザは辺りを見回した。

「くたばれフリー・ザ！」

言つて桃子は気弾乱舞を放つた。

気弾を喰らつて爆裂霧散するフリー・ザ。

桃子は着地し、ドラゴンボールの入つた袋をベビー・ベジータに差し出す。

「ベビー様、私に三つ目を譲ってくれたお礼です。受け取つて下さい」  
「うつ・・・」

ベビー・ベジータはそれを有り難く受け取つた。

「うつ・・・」

ブルマが目を覚ました。

ベビーはベジータから離脱し、ブルマに乗り移つて卵を産み、再度ベジータの体内に戻った。

「ぐつ・・・！」

桃子は右手で右目を押さえた。

「べ、ベビー様・・・！」

「どうした桃子？」

桃子は顔から手を退けた。

右の瞳が元の黄色に戻っている。

「私を操ろうたってそろは行かないわ！」

ベビー・ベジータは感嘆符を浮かべた。

「バカなつ、卵の力を抑えただと！？」

「甘いわね。今のベビー様では、私を完全に操るのは不可能。・・・まあ、私も完全には抑えられないみたいだけど・・・」

「だが俺様のシモベである事に変わりは無い」

「それはどうかしら？」

言つて桃子は気を最大にし、両目を緑に変色させ、ピンクの長髪を逆立たせ、金色短髪に変化させた。

「氣さえ最大にすれば卵の影響は受けない。これで貴様をなぶり殺せるわね」

言つて桃子はベビー・ベジータの背後に高速移動し、

「うわっ！」

思いつ切り吹つ飛ばして追い討ちを掛けて真下に叩き落とした。

ベビー・ベジータは思った。

「こいつはベジータより強い。このままでは殺される、と。

当の桃子は、余裕の笑み浮かべて落下するベビー・ベジータを追いかけていた。

「てめえみたいな奴はつ、消えて無くなれえ！」

言つて桃子は気弾乱舞を放つた。

直下型気弾を連続で浴び、落下速度が更に増すベビー・ベジータ。

桃子を恐れたベビーはベジータから離脱し、液化して彼女の体内に再び侵入する。

(「ひしてジワジワとサイヤパワーを吸い取り、肉体を奪い取つてやる）

だがベビーは、体内への侵入に気付いた桃子に因つて、気合いで体外に追い出されてしまった。

「願いが叶わなくて残念だつたわね」

「黙れメス猿が！」

その瞬間、桃子の逆鱗に触れたベビーの胸に風穴が開いた。桃子がデズビームを放つたのだ。

心臓が止まり、苦しくなるベビー。

「きつ、貴様！」

「さあて、次は何処を痛め付けてあげよつかしら？」

やつぱり脳天？　言つてベビーの額に人差し指を置く桃子。顔がマジだ。

「待て桃子！」

「・・・・・・」

返答は無言で睨むだけ。

「貴様は俺様のシモベだつ、俺様の言つ事を聞け！」

「却下。つーか私、あんたのシモベじゃないから」

言つて桃子は、ベビーの片割れを吐き出した。

「ベビー様、この猿を操れません！」とベビーの片割れがベビーに泣き付いた。

「成る程、その小<sup>ちい</sup>こいのが私を操つてたつて言つ訳ね？」

言つて桃子は微笑みを浮かべる。そして特大のかめはめ波を打ちました。

ベビーとその片割れは悲鳴を上げて消滅。完全に消えた。

桃子は落下中のベジータを見た。

「無に還れ」

言つて気弾をベジータに放つた。

ベジータは跡形も無く消失した。

はあ・・・溜め息を吐き、超化を解く。そして体の上下を反転させ、大地に足を着いた。

「あつ、ドラゴンボールがあー!」

その時、頭の上に袋詰めにされたドラゴンボールが落ちて来て直撃した。

「痛つ」

疑問符を浮かべ、頭から滑り落ちて来た袋を手にする。

「ふう、良かつた」

パオズ山の孫の家に蒲田 志郎から一通の手紙が届いた。  
宛名は桃子だった。

「桃子、手紙が来てるよ」

悟空ジューアに言われてやつてくる桃子。

「有り難う」

桃子は手紙を受け取ると、その場で開封した。  
内容はデートのお誘いだ。

(志郎くんとデート……)

桃子の頬が赤らむ。

「どうした？ 顔が赤いぞ」

「な、何でもないわよ！」

桃子は慌てて二階の部屋に駆け込んだ。  
(パパにバレたら何て言われるか……)

桃子は手紙を見た。

手紙には日時と待ち合わせ場所が書かれている。

(明日の午前十時か)

桃子は手紙を机の引き出しに仕舞った。

翌日の午前十時、桃子はオレンジスターハイスクールの前にやつ  
てきた。

そこには既に志郎が居た。

「志郎くん、待つた？」

「いや、今来たとこ」

「そう。で、どこへ連れていくてくれるの？」

「遊園地」

「ゆうえんち？ それ美味しいの？」

「桃子は遊園地を知らないの？」

「知らない」

「これから行くところが、その遊園地なんだ」

「食べ物じゃないんだ？」

「うん。じゃあ行こうか」

桃子は志郎に連れられて遊園地にやつってきた。

「うわあ、乗り物が一杯！」

その時、大きな爆発音が聞こえてきた。

「今は何！？」

桃子は音のした方を向いた。その先には「力カロツト ッ！ 力カロツト ッ！」

地獄から脱走したブロリーが居た。

「あいつは……」

ブロリーは桃子に気付いた。

「志郎くん、逃げて！」

「え？」

「いいから早く！」

「う、うん」

志郎は足早に立ち去った。

「おい、貴様」

ブロリーが桃子に近付く。

「何よ？」

「力カロツトを見なかつたか？」

「力カロツトつて？」

「孫 悟空とか呼ばれてる奴だ」

(それってパパの事？)

「知つても言わないから！」

「ならば力ずくで聞き出してやる つ！」

ブロリーは超サイヤ人に変身した。

「やる気ね」

桃子も超サイヤ人に変身する。

「タアツ！」

桃子に殴りかかるブロリー。

桃子はひらりとかわして反撃した。

「ぐおつ！？」

後方へ吹っ飛ぶブロリー。

「こいつでも喰らいな！」

桃子はかめはめ波を放った。

「ぐおわああああ！」

ブロリーは爆裂霧散した。

桃子は辺りを見渡した。しかし、志郎を発見する事は出来なかつた。

「志郎くん？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5168c/>

---

新世紀D B

2011年5月19日21時10分発行